蟹と水仙の文学コンクール 入賞者 大賞作品

俳句部門（小学生の部）

大賞
玉滝小学校　六年　蜂須賀　紀行
「水仙をとっておこうよ押花で」

奨励賞
織田小学校　一年　冨田　明日香
織田小学校　五年　田中　亮蔵

佳作
国高小学校　四年　山口　梨絵
城崎小学校　四年　山田　拓斗
城崎小学校　一年　正木　妃乃
織田小学校　二年　上野　大輝
城崎小学校　四年　道前　美月

俳句部門（中学生の部）

大賞
織田中学校　二年　金矢　和起
「水仙の香る越前みなと町」

奨励賞
朝日中学校　二年　粟崎　佳帆
武生第二中学校　三年　中西　由季絵

佳作
織田中学校　一年　田中　康平
朝日中学校　三年　山口　太郎
朝日中学校　二年　渡邉　栄太
朝日中学校　三年　安井　えりか
宮崎中学校　二年　古川　結衣

俳句部門（高校生の部）

大賞
長崎工業高等学校　一年　谷川　史弥
「水仙を風ごと切れば匂いけり」

奨励賞
仁愛女子高等学校　二年　南　千尋
仁愛女子高等学校　三年　黒田　めぐみ

佳作
長崎工業高等学校　一年　岡崎　尚未
仁愛女子高等学校　二年　齊藤　早雪
長崎工業高等学校　一年　有川　楓
長崎工業高等学校　一年　安元　美波
北陸高等学校　三年　長谷川　恵理

俳句部門（一般の部）

大賞
滋賀県　宇佐美　英夫
「蟹漁船待ちて糶場の朝焚火」

奨励賞
福井市　山内　てるこ
奈良県　水谷　あづさ

佳作
奈良県　今西　起久
福井市　松本　和枝
神奈川県　鷲田　早紀
兵庫県　小山　怜子
和歌山県　植松　敏子

詩部門（小学生の部）

大賞
織田小学校　五年　鳥居　咲希
「お正月のかに」

「おいしいか。」
「おいしい。」
お父さんはにっこり笑って
かにのからをむいてくれる
とってもおいしい
かにの味がほっぺにじゅわーと
しみこんでくる
おじいちゃんが毎年くれる
たくさんのかに
「みんな好きやで
　ようけ入れといたでの。」
かにの入った箱を両手で持って私に笑う
私も笑う
「早く食べよう。」
上を向いてかにをあーんと食べる
「今年もいい年になるな。」
家族みんながにっこり笑う。

奨励賞
糸生小学校　一年　加藤　真代
兵庫県 高木小学校　六年　小田　将広

佳作
織田小学校　三年　中西　梨絵
織田小学校　三年　幸山　円
織田小学校　三年　冨田　侑希
織田小学校　四年　森崎　晃輔
四ケ浦小学校　四年　笠原　さつき

詩部門（中学生の部）

大賞
社中学校　一年　高木　菜摘
「私色の水仙と空」

水仙って私と似ている
空を向かず下を見てばかり
でも周りにはたくさんの仲間がいる
はげましてくれたり
一緒にがんばってくれる
だから少しずつ
空を見上げようと
毎日努力する
でもね
そう簡単には
空を見上げることはできないんだ
でもあきらめず
見上げようと努力するとね
いつか
見上げられるんだ
きっと雲一つない
キレイな青空が広がっているよ
その努力と
あきらめなかったまっすぐな心

奨励賞
宮崎中学校　三年　武田　楓
社中学校　一年　桜井　ひなの

佳作
社中学校　一年　斎藤　ゆきな
春江中学校　一年　岡崎　祥
三重県 保々中学校　三年　松尾　朱莉
社中学校　一年　多田　まどか
秋田県 飯島中学校　二年　梅津　奏子

詩部門（高校生の部）

大賞
仁愛女子高等学校　三年　北嶋　梨絵
「いやしを与えてくれる花」

ふと気づけば
そこには一輪の水仙が咲いていた
白い花を咲かせ　すっと咲いている
みためはすごくおとなしく　儚げだ
その花は　私をすごくいやしてくれる
忙しい毎日をすごす私達人間を
そっと見守るかのように
けっして主張することなく
優しくポッと咲いている

なぜ
こんなにも心が安らぐのだろうか？
それはきっと水仙という存在が
母に似ているからだろう

無理に私の中には入ってこない
母の優しさ
かげでそっと見守り支えてくれる
母のぬくもり

私にとって水仙とはそんな存在だ

奨励賞
仁愛女子高等学校　三年　万月　周子
仁愛女子高等学校　三年　金谷　美佳

佳作
福岡県 福岡雙葉高等学校　三年　薛　沙耶加
東京都 藤村女子高等学校　三年　本田　しおん
仁愛女子高等学校　三年　徳力　ゆか
仁愛女子高等学校　一年　岡田　尚子
丹生高等学校　一年　水嶋　愛

詩部門（一般の部）

大賞
千葉県　小泉　和子
「花の咲く場所」

白い水仙の咲く場所を
私は知っています
そこにはかつて
それを世話していた祖母の姿があり
今はそれに重なる
年老いた母の姿があるのです
通学路の脇の畑の片隅ですから

その花の咲く場所には時折
はずむようにして通りすぎる
赤いランドセルの姿も見受けられます

そう、あの子も
この畑で
おばあちゃんからもらった
摘んだばかりの水仙をもらって
学校へと急いだあの子も
ちゃんと私の中にいます
新聞紙にくるまっただけの
なのにその格別の美しさに
早く先生や友達にそれを見せたくて
長い坂道を小走りに歩いたあの子
あの子もそのおばあちゃんも
ちゃんとそこにいるのです

やがて夏が来ると
もう花の痕跡さえもなくなったそこには
ゆらゆらと陽炎がゆれたりして
でもとなりのハウスには
みずみずしい西瓜がなって
ぬけるような青空を仰ぎながら
縁側で家族
みんなでそれを食べたりしたものです
そして秋にはどこからともなく
転がってきた落葉や
夕焼け空を背景に飛び回る赤とんぼ
冬になれば霜柱が立ち
まだとけきれない枯葉や
越冬できぬ虫たちの
その亡骸をとじこめて
新たな春の訪れを
地中に眠る白い花の球根とともに
そこで待つのです

こんなたわいもない日々の
時の営みの上

あるいはその脇に咲いてることを
その白い水仙は知っているのでしょうか
ええ、知っていますとも
そのすっきりと整った顔とえも言われぬ
芳香は私の愚問にそんな答えをくれます
そうですね、代々つづく畑ですものね
私はバツの悪い微笑みを浮かべて
あの日よりももっと遠くへと想いを馳せ
春の匂いを深く吸い込みます
目の前にはもう
じゃがいもの葉が青々と繁っています
そして今年も新一年生が
真新しいランドセルをゆらして
通り過ぎて行きます
私はその後ろ姿に今度はある日の
未来へと想いを馳せ
いつかはこの畑がなくなることも
あるのかも知れないと思いながら
それでも白い水仙の咲く場所は
永遠にここにあるのだと
その花を見つめ
その花の咲く場所へと
そっと手を当ててみるのです

奨励賞
鯖江市　林　都紀恵
静岡県　漆畑　結音
大阪府　槇野　博

佳作
広島県　木塚　康成
勝山市　竜田　道子
京都府　塩見　史子
埼玉県　上田　啓子
京都府　関　剛